

多摩デポ通信 第45号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2018年3月1日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三二・一八

●HP <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

多摩デポも図書館現場も
今やれることを
こなしながら

▼京王線沿線の図書館にTAMALASの最新情報を伝え、利用を促すことができきました。同地域連携の研修講師に呼んでもらえたのです。そこで紹介しましたが、まもなく「一括処理システム」を登録して各自自治体で自由に使ってもらえるところまで来ました。多摩デポではさらにISBN無し資料のより正確な横断検索、同定のシステムを研究しているところです。

▼一方、市町立図書館長協議会では、2月に除籍資料担当者会を発足させたと聞いています。どの図書館もスペース有限で、こなきねばならない業務は多いですが、資料提供で支えあう基盤の、保存での支えあいを前進させていってほしいです（そのためにも都立図書館の支援、参加は欠かせないはず）。

▼「資料の里親」事業に、提供を申し出る図書館、受け取り活用しますと返事する図書館。両方、動き・手ごたえの感じられる今です。

▼講座で会いましょう。

第32回多摩デポ講座

「食の文化ライブラリー」の見学と、経験を聞く会

生活実用書は書庫がきついと除籍していいかなと考えがち。内容は時事性や流行もあり、古くなっていくしなあ。

実用書も範囲としている専門図書館を見学に行き、そこでの利用者との経験を聞こうと企画しました。今回は味の素グループが25年以上続けている「食文化」の図書館。

身近な図書館でも扱う本や雑誌を、きちんと手当を続けたらどうなるか。館外貸出もする面白い施設。見学しませんか？



日時：3月19日(月) 午後1時30分

都営浅草線 高輪台駅改札集合 図書館は徒歩3分(直接現地でも可)

会場：食の文化ライブラリー

港区高輪3-13-65 味の素グループ高輪研修センター内

参加費無料(会員外でも、どなたでも参加できます)

参加申込：E-mailかFaxで多摩デポへ。なるべく3月15日までに。

E-mail: depo_tama@yahoo.co.jp Fax: 042-484-3945

第32回講座のご案内 「食の文化ライブラリー」 見学と、経験を聞く会

地下鉄高輪台駅の近くにある「食文化」図書館ですが、企業の研究開発のための施設ではなく、一般開放され館外貸出（登録料100円）もしています。

食文化、食材、料理、食生活などに特化した4万冊以上の本、50種以上の雑誌を集め大半を開架で公開し、25年以上活動を続けるユニークな施設。棚の風景は大きめの公共図書館の料理本や民俗学のとても充実したコーナーに入り込んだようで、楽しいです。二階は親企業（味の素）のミニミュージアムになっています

珍しい古典籍も所蔵していて今回はそれも紹介していただけますが、多摩デポ講座として企画したのは、公共図書館で普通に収集し

ている生活実用書をきちんと整理し、保存し続けたいられたら、どんな蔵書になり、どんな利用やどんなレファレンスがあるのか、考えてみたかったからです。見学とともに、この図書館の運営と利用の事情、経験を話していただきます。

「食」の関係ばかりでなく、ファッションや裁縫、旅行書やコンピュータ関係など、どんどん新本や雑誌が出るが内容に時事性や流行があり、向き合う現実が変わると利用数は落ち、書庫がきつくなれば保存しにくいと考えがちな実用書。それを図書館はどうしたらいいか。可能性はないのか。

珍しい本を見に行くというより、収集し展開し続けた書架の風景を見て、出会った来館者とのやり取りやレファレンスなどを聞く会。

3月19日（月）です。ご一緒しませんか！

◆ 第31回多摩デポ講座 「印刷博物館」見学会の報告

12月17日（月）、印刷博物館の見学会を行いました。これは会社で以前使われた機械や製品が展示してあるような企業関連の施設ではありません。

世界的に珍しいと聞いたことがありますが、印刷と本の文化を地球大の規模と数千年の時間軸で通観することができる博物館です。館内には（30年ぐらい前までは盛んに行われていた）活字印刷ができる印刷工房もあります。鉛の活字を一字一字拾って指定の文章の版下に組み上げる体験ができる工房で、説明役の指導の下、名刺や一筆箋などをデザインを選んで印刷することができま

す。見学会の参加者は19名。多摩デポ会員は10名。会員外は9名。現役図書館員は

市立図書館3名、区立図書館1名。高校図書館1名。（65歳以上は入館無料ですが、この該当者13名くらい、平均年齢は高め）

「キンダーブックの90年」という企画展が開催され、毎年恒例の「世界のブックデザイン展」の時期で美しく野心的なデザインの新本が展示されていました。

常設展示と工房ミニ体験と企画展と、3時間近く滞在しましたが、変化もあり、皆さんまだ見足りない感じでした。

データでなく質量を持ったモノとしての印刷、本に触れ、近いうちにまた来たいと言っていた方が複数おられました。

未見の方は（次ページからの感想文も参考にされ）ぜひ印刷博物館に行ってみてください。

印刷博物館と「キンダブックの90年」展を見学して

府中市立図書館 林香織

職場の友人に誘われて、この見学会に参加しました。当日、行ってみたいの楽しみを体験しなかったので、事前に施設の詳細は知らない状態で現地へ行きました。

「印刷博物館」とは、少し堅くて印刷物に関わる仕事をしている関係者が訪れる博物館と想像していましたが、子どもから大人まで色々な世代の一般の方々が見学に来ていて、親しみやすく居心地の良い、面白い施設でした。

入場するとすぐにプロログ展示ゾーンがあり、古代の岩や骨などに記録された情報から紙に記録される時代を経て、活字や図版の登場、そして現代のデジタル時代の印刷までの印刷文

化の流れを、見たり触ったりすることが出来る壁面の展示があります。この後に、今回開催されていた企画展示の「キンダブックの90年」を観ました。

1927年11月に『観察絵本キンダブック』として誕生して、2017年で創刊90周年を迎えたこの子ども向け雑誌のコレクションを時代順に見ていくと、発行されたその時代の生活感などが反映されていて、昭和から平成までの身近な歴史の変遷も垣間見ることが出来ました。懐かしい表紙の絵もあって、過ぎ去った幼いころにも思いが巡りました。

その後に見学した総合展示ゾーンにも魅力的な展示物がたくさんありましたが、集合時間が近づいていたため、残念ながら駆け足でざっくりと眺めました。最後に印刷工房に皆で入りまし

た。活字・印刷機についての説明を聞きながら見学し、職人技に感激した後、記念に印刷機を使って参加者全員が手動で1枚ずつ本物の活版印刷機で葉（しおり）づくりをさせていただき終了しました。数時間の滞在では見学しきれず、また改めてゆっくりと訪れてみたい博物館です。



印刷博物館を見学して

中野区立図書館
渡辺佳代子

過日誘われて初めて印刷博物館を訪れた。入口で印刷工房の見学体験まで正味2時間あると聞き、余裕で見てまわれるだろうと思っていたがとんでもなかった。まず入場すぐの展示ゾーンで、ラスコーの洞窟壁画から現代にかけての印刷文化の歴史を見学した。解説を受けた後、私は初めに戻って見直していたので少なくとも30分は見ていたように思う。

大半レプリカなのだが、欧米と東洋の印刷物でカラー印刷の台頭時期の差など、随所で目から鱗（うろこ）気分を味わった。このような歴史を通覧できる展示だからこそ気付けることも多く、だから海外で浮世絵がブー



ムになれたのかと歴史の一面を見たように感じた。企画展の「キンダーブックの90年」展でも、武井武雄やいわさきちひろ、山本忠敬など名の知れた層々たる画家の原稿を見、その深いこだわりに触れることができた。

VRシアターにも参加しているうちに、印刷工房の見学時間になってしまい、総合展エリアはざっとしか

見学できなかった。活字を組むゲームに挑戦し、印刷でカレンダーを作成した。ゲームは数種しかない拳程の大きさの活字を画面表示通り組むものだった。2度ほどチャレンジしたが、いずれも素人レベル。字の向きの違いに悪戦苦闘した。

印刷工房見学の際に、目に見えない程の大きさの振り仮名用活字や書体によって違う数えきれないほどの数の活字の中から、文選（活字を拾う役）のプロは約3秒に1つ拾うと聞き、その余りの速さに絶句した。因みに、1度使った活字は戻すと時間がかかるので、铸造し直し再利用したのだそうだ。カレンダーは、浮世絵のような手法で色を重ねて完成させるタイプで、係の人がほぼ付ききりで仕上がったもののはずなのに、微妙にずれが生じており、印刷の難しさを大いに感じた。

「印刷」を通して、本という媒体の素晴らしさに改めて触れることができ、全体を通して非常におもしろい見学会だった。また個人的にでも是非行って、見る時間がなく心残りだった展示などもすっかり見学したいと思わせてくれた、素敵な博物館だった。

「よみうりたま手箱」

『読売新聞』多摩版に図書館コラムを不定期連載。依頼される頻度はひと頃より減ってきましたが継続しています。

会員には『デポ通信』前号以降に掲載された分を同封します。

▼1月17日
「子どもに学ぶ利用法」
(荻田明子)



岐阜県図書館協議会
岐阜地区研修会で
事務局長が講演

共同保存は未実施だが、取り組みや全国状況を話してほしいと依頼され、12月6日に出張。市立および県立の図書館員を前に話す。岐阜県でもやれば良い、と感想が届きました。

(株)カーリルとの共同研究
定例会報告 その13

できれば多摩地域の全図書館を目標に、TAMALAS地域説明会を行うことを始めています。主に図書館ブロックごとに行っており、最初は2016年12月に小平市で北多摩5市を対象に、2017年6月には国分寺市で第2ブロックを対象に行いました。

今回、2月14日には京王線沿線連携7市(稲城市・多摩市・調布市・八王子市・日野市・府中市・町田市)の図書館職員を対象に第3回を行う機会をこの地域の図書館で持つてもらいました。多くの館長にも出席していただき、二十数人の職員に聞いてもらいました。

まず多摩デポ事務局長の堀渡から「図書館の資料保存と提供の基盤をめぐって」と題して共同保存の必要性

や多摩デポの活動の経過、

(株)カーリルとの共同研究から見えてきた多摩地域内の希少蔵書の現状やTAMALAS開発の経過をお話ししました。その後、(株)カーリル代表の吉本龍司氏からTAMALASの具体的な使用方法や検索能力、そして大量の除籍候補資料を一括で検索する一括処理システムの処理画面と使用方法の説明をしてもりました。

一括処理システムは、近いうちに多摩デポホームページに公開する検索窓に、調べたい蔵書のISBN入りExcelデータを投入することにより検索が始まります。大量のデータでもそのまま自動的に検索を行い、全行の検索終了後、Excelデータの最後の列に各所蔵数が表示されます。その点もデモでご紹介しました。データでの一括処理なので、

書架にある分類番号順にするとか仮に箱詰めしたリスト順とか、図書館現場で、あとで現物を取り出しやすいリストのデータの形にして使ってください。

一冊ずつ現物のISBNのバーコードを読ませる想定のことまでのTAMALASに加え、この一括処理システムの提供によって使い勝手は格段に向上すると考えています。

一括処理システムは自治体ごとに登録して参加する方式を考えています。そのため「TAMALAS一括処理システム利用規定」を作成しました。図書館の理解を得た上で提供したいと考えています。

図書館にある蔵書すべての検索のためには、さらにISBNが付いていない資料に対応できることが課題です。(株)カーリルではISBN無し資料にも対応で

きる「多摩デポ統合検索システム」を開発中です。共同研究では現在、その試行版の性能を検証しているところです。ISBN無し資料をこの検索ツールで統合検索し、その結果を各図書館の発するOPAC情報と照合し、かつ都立図書館の統合検索との比較検討も行っています。結果をシステム改善に生かしていきます。

ISBN付き資料に対応した二つのTAMALASと開発中のISBN無し資料の検索システムの両方を提供することでより適切な除籍と保存を促し、多摩地域の共同保存の取り組みの土台となれるものを作ろうと考えています。遅い歩みですが進めていきます。



多摩デポブックレットを 話題にしましょう

『書物の時間―書店店長の の想いと行動―』

福嶋聡／著を読んで

渡辺百合子（会員）

本書は2016年2月27日に開催された第25回多摩デポ講座の記録として2017年8月『多摩デポブックレット11』として刊行された。当日は福嶋聡さんのお話が聴けると講演会にいそいそと出かけ、ツボを押さえたお話に大笑いして帰ってきたものだ。

○図書館と書店

図書館には、ある程度評価の定まった著者の本はあっても、これから出てきそうな著者の本が少ないのではないか。図書館の選書は慎重なので、致し方ないこ

とかも。一方、書店は本の命が短いので、絶版品切れになって一冊も残っていない本がたくさんある。「図書館に行かないと手にとれない、書店では命が短くて置いていない本は幾らでもありません。（中略）最先端の本というのは、やはりタイムラグがあるから、図書館より書店で見てもらった方がずつとわかりやすい」と、図書館も使いこなす福嶋さんは、両者の特質をとらえた上手な使い分けを提示されている。

笑いながら聞いていた話を活字で読み返してみると、福嶋さんの図書館頑張れのエールであり、決して皮肉ではないと思うものの、福嶋さんは「図書館のブックフェアというのはすごく充実できるのだからなあ」と仰っていたりするのだ。

○不毛で不可解な抗争に
抗して

「図書館の自由に関する宣言」を資料として、図書館が無料で本を提供することは「お金をかさなくとも本は読めるという、憲法にもとづく国民の当然の権利」であると。対して、書店はお金を払うことで「読者が書き手に投資してくれる、その窓口」であり、本の提供の仕方が全然異なるのだから「図書館がタダで本を貸すから本が売れない」と怒っても仕方がないと。本を求めてきた人に、書店は「絶版・品切れ」といつても怒られないが、図書館が「除籍しました」というと怒られる。「著者が原稿を書き、出版社が本にして、書店が売って、図書館が保存する」という流れの最後に、デポジットライブラリーの活動がある。

福嶋さんは、出版社、書店、図書館の三者が協力して大阪市立中央図書館で著者の

トークショーなどのイベントを行ったそうだ。会場は図書館ホールを使い無料、入場料も無料で大勢の読者に喜ばれた。図書館の集客力を利用して、出版社、書店、図書館の三者がウインウインの関係を作れるまたとな機会。著者の話に感動した余韻の残る会場内で本を売ることで、著者も地元書店も潤う。イベント会場で本を売ることは営利活動とされる役所で、図書館はまずそこを打破することから取り組んでみたらどうだろう？ 自分自身の経験からも本を売るのは営利活動と区役所の後援を貰えなかったイベントが多々ある。

○棚まで案内

「本は見やすいように並べ、客に本の所在を聞かれたら、一緒に案内して棚に行け」と福嶋さんは書店員に指導している。棚に行くと、客の方が先に本を見つけてるのは

「それを読みたいという欲望があるから、モチベーションの強さが違うから」で、正確に言語化できていなくても棚を目にするとともに読みたいものが見つかることも。書店では、店に来た客を誘惑するような棚を「棚で絵を描く」と言うそう。書店には毎日二百冊の新刊が届くが、箱を開けていると「アレ？これ何だろう」という本が目につく。また本当に面白い本はどの棚に入れたらいいのか悩む本で、その本を入れた棚がガラッと変わる本であるとのことだ。全て、図書館のレファレンスや分類に繋がる言葉だ。ちよつと違うかもしれないが、昔「本は背で覚える」と先輩に教えられたことを思い出す。

○中立ってなんだろう

「ある本に影響された自分の考えだけが正しいと思いつけることは危険であ

って、そこは常に相対視したい。本を読む時には、別の見方、考え方もあるのでということをわかっていないといけないと思うし、そのためにも書店の店頭には多様な本が並ぶようでありたい」「意見と言うのは偏っているから意見なのであって、偏っていない意見などない。」「ただ中立」という立場などはどこにもないので、偏ってはいけないからすべての意見を放棄して「ただ中立」というのは、全然立派なことではない。「書店で何をやってたって影響力はない、怖くないと思われたら、それこそよっぽど侮辱的なことです」。「書店があること、書店に行くこと自体に価値がある。書店に行くから思いがけない関連書にも、知らない本にも出会えるのです。それを楽しみにしてください」。

書店に図書館を書き加え

て、共に本読みを増やす活動ができればと願う。



『書物の時間—書店店長の想いと行動—』を読む

荒井寿恵
(学校図書館司書)

この講演は丸善ジュンク堂立川店のオープン翌日に国分寺市で開かれたもので、満席の会場は福嶋氏の名調子に湧き、私もただただ聞き惚れていた。講演録を手にして、内容を忘れていた自分に呆れながらも、「紙の本は、滅びない」「本と目があう」などの見出しに目と心を奪われて読み進むと、多様なアイデアに満ちた福嶋氏に改めて魅了された。

福嶋氏の話の要諦は「お金」の問題である。

昨年10月の第103回全国図書館大会東京大会で最も社会的な話題となったのは第21分科会「出版と図書館」での文藝春秋の松井清人氏の「文庫本は重要な収益源。図書館は貸出中止を」との発言だった。またかと思った人が大半だろうが、福嶋氏は二年前のこの講演の時すでに、この作られた対立の構図を「出版界と図書館の不毛で不可解な抗争」とまとめている。当日の配布資料「図書館の自由に関する宣言」にあるとおり、無料で本が読めるという国民の権利を宣言する図書館にたいし、書店は本を作る人（作家、出版社）が自らの再生産をするための「投資の窓口」だという。出版社の言い分も読者に本を買ってほしいということである。

福嶋氏は、読者にとつては「読みたくなつた時が新刊」なのだから、「書物の持つ時間」を想像せよという。新刊書店だけでなく古本屋から図書館、デポジットライブラリーまでに流れる時間と、「紙の本」の循環維持を考えさせる。

では、出版社と書店と図書館の「具体的な連携」はどうすればよいのか。効果が如実に見えるのが、図書館の持つ無料会議室を使った著者のトークショー開催とそこでの書籍販売で、大勢の読者に喜ばれたという。映画の寅さんの啖呵売に似ている。また、新しいことをやるときには「勝手にやったほうが上司のためにもいい」というのは現場の知恵だろう。この判断と決定ができる人のいることが必須である。市民として要望していくべきことだと思ふ。

講演のときから一年足ら

ずだが、社会の動きに加速度がついているのだろうか。講演でふれられた安本法制反対運動の SEALs は活動を終えたし、「NOヘイト本」フェアも遠いことに思える。問題はより深く潜行しているのだろうか。しかし一方で、マスメディアに飽き足らず、市民が自らの考えを出して議論したい思いも高まってきている気がする。

福嶋氏は民主主義とは「誰もが自分の主張を言えることが唯一の定義」だとする。従つて、「意見というのは偏っているから意見なのであつて」、全国紙の「両論併記」という「中立」はまやかしだと指摘し、議論していくためにこそ本があるのだという。

多摩デポジットの印刷博物館見学会で、日本で最初の印刷物だという百万塔陀羅尼のレプリカを見た。福嶋氏も講演で電子図書の問題

にふれ、百万塔陀羅尼を例に「紙の本はコンテンツとプレーヤーが合体しているためにメディアとしていかに強靱か」と述べている。

私は、この印刷物(アイデア)の容れ物である「塔」に注目したいと思う。本来は著者の考えは隣に行つて聴くべきところを、塔という容器に載つて伝わってくるのである。この役目をするものがどこかにないか。それは集会や、読書会、文庫、学校図書館など、小さな場所に宿つているように思う。成田康子は『高校図書館デイズ』(ちくまプリマー新書)を著して、学校図書館で確実に読者が育まれていることを示した。南陀楼綾繁は『編む人』(ビレッジプレス)でミニコミ発行者にインタビュして、本を編むだけでなく、人を編み、場を編む可能性を紹介している。

福嶋氏は最後に「書店に

行くこと」の素晴らしさを強調している。「棚で絵を描く」ことができ、客と「一緒に棚に行け」る書店員のいる書店には「発見」があるということだ。人間は「自分の欲望を言語化できているのはごくわずか」なので、棚に並べられた本を目にした瞬間に自分の思つていたことを「発見」できるのだという。図書館でも同様のことが起きているのではないか。分類、排架、レファレンスインタビュなどの業務をとおして、利用者にも図書館員自身にも「発見」を生んでいると思ふ。

実は最近、個性的な書店や図書館の棚を見るのをしんどいと思うようになっていたのだが、本書を読んで、丸善ジュンク堂や独立系といわれる書店に行つてみたら非常に面白く、得るものが多かった。福嶋氏の魔法にかかったのかもしれない。

「図書館資料の里親探し事業」のあれこれ

—依頼を待っていました！

最近ご依頼が減少傾向の「図書館資料の里親探し」。今年度は全く無しか？と思いきや、年度終盤に入って複数の図書館から続けて依頼をいただきました。

『原色牧野植物大図鑑』等の参考図書や『筑摩現代文学大系』等の全集、その他、比較的高価な専門書や復刻版資料について、除籍する複本や蔵書とダブる寄贈本を他の図書館で活用してほしいというお申し出です。

—所蔵状況調査スタート

早速、都立図書館の統合検索や各図書館のOPACで多摩地域の各図書館の所蔵状況を一点一点調べ、タイトルの有無は勿論、シリーズ本なら欠本状況などを

細かくメモします。文学全集の欠本の多いこと！完全揃いで所蔵している館の方が少ない。長年の間に壊れたり返却されなかったり、色々と事故があったのでしよう（複数の館で同じ巻が欠本だったりもします。夏目漱石とか芥川龍之介とか）。品切・絶版ではいまや補充もできず、悔しい思いをしているはず。

—里親館求む！

調査が済んだら里親館の募集です。各図書館宛に送るFAX原稿を作成。「ご所蔵の本に欠本や汚破損はありませんか？—図書館資料の里親探し—」の見出しの下に、送付先館ごとの所蔵状況を記して、「お持ちの本の状態をご確認のうえ、補充やお取替えのご希望がありましたら、どうぞお申し込みください」と呼びかけ

「図書館資料の里親探し事業」とは…



多摩地域の市町村立図書館で書架に余裕がなく“複本があるため除籍する資料”または“寄贈を受けたがすでに所蔵しているため受入れしない資料”のうち、各図書館で“基本図書と思われるため、市民リサイクルに出すより図書館資料として再活用させたい資料”を、それを必要としている公共図書館・学校図書館等を探し出して、譲渡の仲介を行うものです。

多摩デポでは2008年7月から実施しています。

しました。館別に原稿を作成するのは、日々忙しい職員の皆様は、調査時間を節約していただくため。申し込みは、希望の本がある場合は、用紙に印をつけるなどして返送するだけです。

—来るかな、申込み…

各図書館の書庫スペースは年々ひっ迫の度合いが増し、定評ある本でもなかなか引き取り手が見つからなくなってきました。欠本でも補充を希望しない館があります（そのうちシリーズごと除籍になるのではないかと危惧してしまふ）。だから締切日まで、FAXやEメールをドキドキしながらチェックするのです。

—応募が来た！

今回、全集本を含む募集では次のルールで里親館を決めさせていただきました。「申込み多数の時は、原則として①一括引取希望②欠本補充③汚破損本取替えの順で、各先着順」するとFAX送付の当日2館、翌日2館、その後もお申し込みが。全集の欠本分を全部希望する館や、「その

他、汚損本の取り換えに使う分も合わせて欲しい」という館もありました(欠本はOPACで調べられるけれど、汚破損、書込み、日焼けなどの状態は現物を調べないとわからない—OPACは万能ではない)。

先着順とはいえ、即日応募(しかも数時間内に)があるのは、選書について即断できる図書館の体制があり専門職員がいる多摩地域の図書館だからこそですね。

一部、欲しい本が重なり、セット一括引取希望の館があったりして、欠本巻補充にお応えできなかつた館があったのは残念なことでした。また、応募くださる館がなく里親が見つからなかつた本も一部ありました。

—結果のお知らせ

締切日に集約をして里親

館を決定し、依頼館(本の提供館)と応募館に結果をお知らせします。依頼館から「里親が見つかって嬉しい。」「お願いしておいてよかった。」と言っていただけで、私達もホッとしました。

—本の引き取りとお届け

依頼館と日程調整し、本をお預かりして、里親館へ順次開館日にお届けしていきます。冊数が少なければ、デイクパックに詰め込んで自転車や電車を乗り継いで数館回ることもあるのですが、多い場合は車で訪問。「ああ、多摩デポさんですね」とすぐわかっていただけると、とても嬉しいです。本も、新しい活躍の場に落ち着くことができ、嬉しいのではないのでしょうか。

—今年度の依頼本から

『レーモン・ラディゲ全集』

(東京創元社 1976)は、募集時に著者紹介を添えようかとも思っただけでもスペースがなく割愛。でも、申込みがあり成立。

『刀工大鑑』(得能一男著 光芸出版 1982)は初版が1977刊。決定版2004、太鼓版2013刊。現在入手可能かどうか books.or.jp (<http://www.books.or.jp/>) で調べると決定版(6,480円)のみヒット。本当は新しい版が欲しいところでしょうが、成立したのは予算が厳しいためと思われまふ。(刀剣女子)が使ってくれるかも？

『原色牧野植物大図鑑 合弁花・離弁花編』(北隆館 1996)は成立せず。『APG原色牧野植物大図鑑』1・2(2012~2013)も出たいますものね…。

(事務局 吉田)



★会の現勢

2018年3月1日

現在

●正会員

(個人会員87名)
(団体会員2団体)

●賛助会員

(個人46名)
(団体1団体)

会の活動は皆様の会費・寄付で支えられています。会費納入がまだの方には振込用紙を同封しました。ご多用中とは思いますが、お振込みをよろしくお願ひします。

●年会費

正会員 (個人・団体) 五千元
賛助会員一口 二千元
(個人一口団体五口以上)